

# 研究会レポート

## 北方海域技術研究会 (社)日本技術士会北海道支部/ 北海道技術士センター

### 『平成17年度 第1回特別講演会』と 『平成17年度 第1回定例会 — 高知県視察』の報告

#### 1. はじめに

北方海域技術研究会では、2005年7月15日に『平成17年度 第1回特別講演会』、2005年9月12～14日に『平成17年度 第1回定例会 — 高知県視察』を行いましたので報告します。

#### 2. 『平成17年度 第1回特別講演会』

『平成17年度 第1回特別講演会』は、2005年7月15日に札幌アスペンホテルで、社団法人 日本港湾協会 理事長 栢原英郎氏をお招きし、『北東アジア輸送回廊構想について』と題してご講演をいただき、北海道技術士センター会員など約100名の参加がありました。講演会では栢原講師より、①9本の北東アジア輸送回廊、②北東アジア輸送回廊の現状と課題、③北海道との交流活発化の可能性などについてご講演をいただき、講演後には多くの質問が会場よりなされました。



写真-1 講演会の様子

#### 3. 『平成17年度 第1回定例会 — 高知県視察』

##### (1) 『視察日程』

『平成17年度 第1回定例会 — 高知県視察』は、

表-1に示すとおり、2005年9月12～14日の日程で実施されました。

表-1 視察日程

日程	視察概要
9月12日(月)	新千歳空港→羽田空港→高知空港 『技術交流会』(高知県水産会館)
9月13日(火)	『上ノ加江漁協 コンブ養殖視察』 『佐賀漁協 カツオふれあいセンター視察』 『窪津漁協 アワビ養殖施設視察』
9月14日(水)	高知空港→羽田空港→新千歳空港

##### (2) 『技術交流会』

9月12日には高知県水産会館で『技術交流会』が開催されました。『技術交流会』には北海道からは北海道技術士センター・北方海域技術研究会会員等16名、高知県からは地元関係者約100名の参加がありました。

講演内容及び講演者を表-2に示します。

表-2 講演内容と講演者

講演内容	講演者
①北方海域技術研究会の活動概要	北方海域技術研究会 幹事 豊谷 勝雄氏
②水産業を核とした地域振興の考え方	北方海域技術研究会 相談役 長野 章氏
③北海道における藻場造成技術	北方海域技術研究会 会員 吉田 徹氏
④IT技術を利用した漁業振興—水産物のトレーサビリティと流通支援	北方海域技術研究会 会員 若林 隆司氏
⑤技術士制度—北海道における資格取得の取り組み	北方海域技術研究会 幹事 清野 克徳氏
⑥高知県における藻場造成技術について	高知県水産試験場 田井野清也氏
⑦土佐黒潮牧場について	高知県水産振興課 岩崎 健吾氏
⑧高知県漁海況システム	高知県水産振興課 中平 康博氏

質疑応答では、

- 漁海況システムの利用者、利用の多い内容
- 藻場造成における栄養塩の供給の仕方、藻場礁の実施方法、フノリ礁の事業評価
- ウニ駆除の取り組み方法

などについて、高知県地元関係者と北方海域技術研究会会員等との間で活発な技術的議論がなされました。

### (3) 『上ノ加江漁協 コンブ養殖視察』

中土佐町上ノ加江地区にある上ノ加江漁協では、厳しい経営状況や組合員の高齢化などに対して、コンブ養殖事業や体験漁業による交流促進などへの取り組みがなされている。コンブ養殖事業は、ホソメコンブを対象として磯焼け対策などとして青年部・女性部が中心となって始められたが、当初は魚類による食害のため養殖する場所を試行錯誤し、現在では「上ノ加江こんぶ美人」の名で商品化し、300g詰めパック 250 円で販売されている。北海道産のコンブと比べてカルシウム、鉄分が多く含まれ、大手量販店からの買い受けに対する問い合わせもあるが、地産地消を基本としているため、全体の数量の半分は地元で消費しているとのことであった。また、体験型観光では、カンパチへの給餌体験、釣り、ロープワーク体験など現在 8 つのメニューが用意され、平成 18 年度には交流施設を整備される予定である。

### (4) 『佐賀漁協 カツオふれあいセンター視察』

佐賀漁港は、高知県幡多郡佐賀町に位置する第 3 種漁港である。漁港敷地内に設置された「黒潮一番館」（カツオふれあいセンター）では、ブルーツーリズムの一環として、佐賀漁協女性部が中心となって修学旅行生などを対象として「カツオのタタキづくり体験」を行っている。5 年前にはじまった「カツオのタタキづくり体験」は、苦しい漁業協同組合の経営状況の中で生まれたもので、当初は旧市場や漁民センターを借りて行われていた。「カツオのタタキづくり体験」の体験者は、平成 14 年に 400 人、平成 15 年は 800 人と増加し、このような実績から県の補助で黒潮一番館が平成 15 年 11 月に建設された。平成 16 年の体験者は 2,100 人、平成 17 年は 9 月時点で 1,900 人と着実に成果が挙がっている。このよう

な成功の背景として、体験の指導者としての漁業協同組合の婦人部 50 名、漁師 20 名程度のボランティアによるところが大きい。しかし、今後の課題としては、大変好評なカツオのタタキ体験ではあるが、観光客を 2 時間程度しか佐賀漁港に留めることができないことから、通過型から滞在型へのシフトすなわち宿泊客の確保とのことであった。

### (5) 『窪津漁協 アワビ養殖施設視察』

窪津漁港は、土佐清水市、足摺半島の付け根付近に位置し、かつては鯨漁が盛んであったが、現在は定置網漁が主となっている。しかし近年漁獲量の減少が続く、売上も落ち込んでいる。この漁獲減少分を少しでも何とかしようと、平成 5 年から定置網観光に取り組み、網持の体験ツアーで足摺岬や四万十川から観光客を呼び込んでいる。また、平成 7 年には朝市を開催し、日曜朝市として活動を続けていたが、平成 12 年 4 月に漁協の直販店である「大漁屋」をオープンした。平日でも 120~130 人の客入りがあり、わずか 20 坪、職員 2 名の店で、昨年度は 7 千 2 百万円を売り上げた。

昭和 58 年に開始した陸上でのアワビの中間育成は、当初栽培センターから種苗を購入し、20~30 mm まで中間育成した後地先に放流していた。しかし、磯焼け現象が進行し、アワビの餌となる海藻がなくなり、加えてアワビを採る漁業者が減り、助成金がカットされた。この状況の打開策として、現在は放流せずに 3~4 年蓄養した後そのまま出荷している。これも足摺岬という大きな観光地を最大限に利用した取り組みで、ホテルへの安定供給を基盤に高い魚価を維持している。アワビ育成の水槽には刺し網で漁獲された伊勢エビも蓄養されていたが、同様の理由から、窪津の伊勢エビは高い魚価（上ノ加江漁協に次いで高知県 2 番目）で取り引きされている。

足摺岬と四万十川という大きな観光地の中間に位置する窪津漁協では、交流人口の拡大とそれに伴う漁村の活性化に着眼した取り組みで、漁業の維持を図ってきた。今後も、インターネットによる漁獲物の販路の拡大や、レストランの直営などの構想があるとのことであった。

（文責：北方海域技術研究会幹事長 寺島 貴志）